座長：大野篤志(市立八幡浜総合病院 内科医長)、大西慶(愛媛県立中央病院 地域医療キャリア形成支援センター 医長)

地域を診る、地域を導く―国試だけで終わらない医師の育て方

松山　泰

自治医科大学医学教育センター長 教授

自治医科大学では、47 都道府県の医師不足地域に医師を輩出するという建学の理念のもと、医師国家試験合格率 100%を目指した教育体制を構築している。その背景には、1 名の不合格が都道府県の特定地域における医師供給の大幅な損失につながるという事情がある。こうした状況から、同大学の教育が国家試験対策に偏重していると見なされることがあるが、それは誤解である。本学が真に重視しているのは、患者・地域の多様な課題を解決するために不可欠な「協働学習力」の育成である。

本発表では、この協働学習力の育成を理念とした本学の教育実践を紹介する。まず、入学直後の「生命科学」では、入試科目の選択によって生じる知識差を活かし、学生同士が教え合う環境を推進している。3学年では、「環境医学実習」および「疫学実習」を通じて、地域での研究活動に通じる、協働して研究を計画し遂行する力を育成している。さらに、同学年の「PBL テュートリアル」では、マルチメディア教材を活用した疑似診療体験を通じてグループで EBM を実践してもらい、4学年以降の臨床実習（BSL）での担当患者の課題解決の実践につなげている。6 学年には、寮内に設けられた「勉強会室」において、協働学習力を基盤とした教え合いの文化が形成されており、高い国家試験合格率を支える要因となっている。

さらに、各学年に地域医療を意識した独自の教育プログラムが配置されており、地域の実情に沿った医療の実践者（「地域を診る」プレイヤー）であり、地域医療の課題を行政的アプローチで解決する政策者（「地域を導く」マネージャー）となる人材の育成を目指している。「地域を診る、地域を導く」プレイヤー兼マネージャーの育成こそが、本学の医学部教育の本質的な使命である。

【略歴】

2001 年　自治医科大学　卒業（静岡　24 期生）
2001 年　静岡県立総合病院
2003 年　引佐赤十字病院（総合内科）
2005 年　浜松市国民健康保険佐久間病院（総合内科）
2011 年　自治医科大学地域医療学系血液・免疫疾患学博士課程　卒業
2011 年　伊東市民病院（総合内科）
2015 年　オランダ・マーストリヒト大学医学教育学修士課程　卒業
2020 年　オランダ・マーストリヒト大学医学教育学博士課程　卒業
2022 年　自治医科大学医学教育センター（兼　総合診療内科、アレルギー・リウマチ科）教授
2024 年～自治医科大学医学教育センター　教授／センター長（現職）

日本内科学会・資格認定試験委員（副委員長）など、日本医学教育学会・医学教育専門家委員など、日本リウマチ学会・医学部卒前教育委員、日本医師会・JMA Journal 編集委員。代表著書：医学部教育における自己調整学習力の育成－専門職アイデンティティ形成からの視座. 福村出版, 2021

座長：大野篤志(市立八幡浜総合病院 内科医長)、大西慶(愛媛県立中央病院 地域医療キャリア形成支援センター 医長)

超高齢社会に期待される総合診療医の育成

川本　龍一

西予市立西予市民病院　スーパーバイザー／愛媛大学医学部附属病院　地域医療支援センター長・特命教授

地域で活躍する総合診療医の育成には、地域医療機関での実地体験が重要である。すでに超高齢社会を迎えているへき地では、かかりつけ医として全人的医療を担う総合診療のアプローチが強く求められており、予防から治療、在宅診療に至るまで、地域全体を包括的にケアする視点が必要である。学生や研修医は、実際の医療現場に身を置くことで、地域医療の本質を体感し、将来のキャリアを具体的に思い描くことが可能となる。こうした背景のもと、2009 年 1 月、愛媛大学医学部に愛媛県からの寄附により地域医療学講座が設立された。同講座では、医師不足が深刻な地域に位置する西予市立野村病院、久万高原町立病院、後に愛媛県立南宇和病院にも地域サテライトセンターを設置し、学生がOn-the-Job Training形式で地域医療を学べる教育体制を整備してきた。各施設で現在勤務する若手医師の多くが、学生あるいは研修医として当地で経験を積んでおり、地域医療人材の循環・育成に大きく貢献している。現在も医学生や研修医が実習や研修に訪れており、地域住民の理解と協力のもと、予防、治療、外来・在宅・入院診療に至るまで、幅広い医療実践の現場を経験している。こうした「地域をケアする」学びは、将来の実践力を育むうえで極めて有意義であり、へき地医療に従事する人材の育成が期待される。一方で、持続可能なへき地医療の実現には、医師が働きやすい環境の整備が不可欠である。2025 年 4 月からは、西予市立の 2 病院と老健施設が地域医療振興協会の運営下に入り、医師を含むすべてのスタッフが同協会の職員として施設間で連携しながら、当直や診療支援などの業務を柔軟に担える体制が構築された。当施設には自治医科大学卒業生も多く在籍しており、同大学卒業医師の初期研修終了後の派遣先としても機能している。現在は、自治医科大学卒業医師の指導のもとで、専門研修医や初期研修医、さらには医学生が「屋根瓦式」に学ぶ教育体制が整備されつつある。また、愛媛県では、義務年限を終了した自治医科大学卒業医師の県内定着および医師不足地域への人材確保を目的として、県立中央病院内に「地域医療キャリア形成支援センター」を設置しており、地域貢献と個人のキャリア形成の両立が可能な支援体制が構築されている。地域医療に貢献するうえでは、将来どのような専門領域に進んだとしても、総合診療のマインドを持つことが不可欠である。

【略歴】

1985 年　自治医科大学卒業
1985 年　愛媛県立中央病院初期研修医
1987 年　町立野村病院内科医員
1990 年　三崎町国民健康保険二名津診療所所長
1992 年　自治医科大学医学部地域医療学講座後期研修医
1993 年　西予市立野村病院内科医長
1998 年　西予市立野村病院副院長
1998 年　自治医科大学医学博士の学位取得
2009 年　愛媛大学医学部地域医療学講座教授
2009 年　自治医科大学医学部地域医療学講座臨床教授
2018 年　広島大学医学部地域システム学講座客員教授
2025 年　愛媛大学医学部附属病院地域医療センター長・特命教授

座長：大野篤志(市立八幡浜総合病院 内科医長)、大西慶(愛媛県立中央病院 地域医療キャリア形成支援センター 医長)

私と総合診療　～専門医制度について考えること～

坪野　俊介

医療法人社団 眞結会 こうなん family クリニック

2018 年度より新専門医制度が始まった。高齢化による複数の疾患を抱える患者の増加、地域医療の偏在解消などを目的に既存の内科や外科などの 18 の専門医に加え、19 番目の専門医として「総合診療専門医」が新たに誕生した。

ちょうどその頃、私は自治医科大学を卒業し、地元新潟のへき地で内科医として日々目の前の患者の診療にあたっていた。内科とは言っても、へき地には各科の専門医がいるわけではない。内科に限らず、整形も泌尿器も皮膚も、とりあえず何でも診てみる。病気を治すだけではなく、時には患者の生活背景にも介入する必要が出てくる。難しい問題には多職種で協力して取り組む。やっていることはまさに総合診療だった。先輩や後輩が将来の専門を決め、大学の医局に入局していくのを尻目に、私はどうしても専門を決めることの利点を見いだせずにいた。ただ時間だけが過ぎていき、いつの間にか私は医局にも属さない、専門も決めない特異な存在になっていた。

自分で決めた選択ではあるが、キャリアに不安がなかったかというと嘘になる。そんな私にとって、総合診療専門医の誕生はまさに朗報だった。総合診療専門研修プログラムの一期生に応募し、三年の研修を経て無事専門医を取得した。新潟県第一号であった。本シンポジウムでは、そんな特異な経歴を持つ私が、なぜ総合診療の道を選んだのか、総合診療専門医とは、専門医を取得した今思うことについてお話したい。

【略歴】

2014 年　自治医科大学卒業
2014 年　新潟大学医歯学総合病院　初期研修医
2016 年　新潟県立中央病院　総合内科
2017 年　新潟県立柿崎病院　内科
2020 年　新潟県立中央病院　総合内科
2021 年　新潟県立津川病院　内科
2021 年　日本専門医機構認定　総合診療専門医取得(一期生)
2023 年　医療法人社団眞結会　こうなん family クリニック